

ジャータカの仙人像(一)

佐久間光昭

ジャータカ五四七話のうち約一一〇話の *Aṭṭhakathā* 部分に仙人 (*zṛi*) が登場する。同一人物が仙人とも行者 (*śāraṇa*) とも呼ばれる例が多いが、こゝでは *Aṭṭhakathā* 中で仙人とされている人物の例を中心に考察する。

I 出家前

彼らの出家前の階級・職業が記されている事例のうち約七割がバラモンで約一割が王、一割弱が王子である。その他王妃・長者・陶師・理髪師・獵師の子、チャンダーラなどの例がある。

II 出家

1、年齢

出家の時期は十六才から両親の死後、息子の生れた時、妻の死後、息子の歩き始めた時、頭に白髪のはえた時までいろいろである。

2、機縁

出家の理由としては「諸欲の過患(と出離の利益)を見て」出家する例が多い。両親の死によって宗教心を起して出家した例や病氣が直つて出家した例もある。

3、出家

王に出家の許可を求める例は数例のみである。出家する時は財産

は人々に布施し、事物と煩惱の諸欲を捨てて出家する。行者のもとで仙人出家をした例もあるが、一般的には仙人出家では特に誰かにつく必要はなかったようである。

III 修行

1、修行地

仙人が修行する所は山岳、森林、川や池の近く、都市・町・村の近く、国境、王園などである。山岳(特にヒマラヤ)で出家修行する例が多い。

2、庵

庵には細い道が通じ、近くにはす池、水浴場、井戸がある例がある。便所は川屋ではなかったようだ。庵の中には水がめ、臥床木や板でできたしきものなどがある。

3、衣服

仙人は髪を結び、「赤い」樹皮の衣を上下につけ、獣皮を一肩にかける。

4、持物

持物には杖・天秤棒・水瓶・坐具・楊枝・托鉢の器・小刀などがある。

5、食物

食物は朝に森の草木の根や果実を集めて出て夕方に持ち帰る。落ちている果実を食べ、生存に必要なだけを食べた。例えばマンゴーやニグロダーの実、蓮根を食べている。木の葉や花・樹皮を食べた例もある。もみで包まれたもの(Ⅱ穀物?)は食べない者もいた。塩けのものは取つていないようだが、宗教的理由があるのかどうかは不明である。

6、修行・能力

仙人の行なう修行とそれによつて得る能力には遍の準備定、「(五)神通」、「(八)等至、禪定、ヨーガ、苦行、慈などがある。

a、禪定

禪定は「神通力の基礎となるもの」であると同時にそれ自体が一種の神秘的な力を表わすと思われる。女に対して煩惱を起したり、心が執着したり、破戒行為を行なつたりすると禪定が消え、禪定を失うと空が飛べなくなる。しかし愛欲を捨てさり、又は遍を行ない、又は四梵住を行なうと再び禪定を得て空を飛べるようになる。

b、苦行

仙人の中には激しい苦行を行じる者もいるが、彼らはまた禪定も獲得している点から見て仙人にとつては苦行と禪定は二者択一的なものではなかつた事が分かる。

7、事火

仙人の庵には火を扱う所があるが、祭火を捨てて仙人出家をした例も見られる。一四四話と一六二話の例で見ると、祭火は家庭生活と対立し、森林に住んで梵天界へ生じる事を目的とする。両例とも仙人出家してから神通と等至を獲得して梵天界へ生じている点から見て、神通・等至などの獲得が仙人の特色のように思われる。

IV 出山遊行

雨期になると草木の根や果実は得にくくなり、仙人は山を出て遊行する。遊行の目的は「塩けのものと酸っぱいもの」を求めてである。そうすれば体も丈夫になるし、「持戒者に施食を与え礼拝する者は天界へ行く」からである。つまり栄養をつけて体力を回復させるためと人々の要求に応えるためであると考えられる。

ジャータカの仙人像(一)(佐久間)

出山して雨期を過ごす所は村の近くの場合もあるが多くはバーラナシーやラージャガハなどの都市の近くの王國である。山から降りてきて王國に一泊し、翌日身なりを正して城内を托鉢にまわる。王や長者などが食事などを提供する例も多い。庵に住む事もあり、ただ木の根元にいる事もある。人々は彼らに布施をして随喜の語と説法を期待し、問いを出す。

雨期が終り、山に花が咲き実を結んだ頃、または何年か王國で過した後、再び山へ戻る。年をとつた仙人はそのまま王國に留る場合もある。

V 死後

仙人は死後帝釈天となつた一例、チャンダーラ出身の仙人が鹿の胎に生れた一例、三十三天に生れて帝釈天に生れている王の妻となつた後の一例を除いてすべて梵天界に生れている。

VI その他の問題

仙人と女

a、仙人と女

前述の如く、仙人が女に執着したり、煩惱を起したり、破戒行為をすると禪定を失うが、永遠に失うのではなく、取り戻す事ができる。また「女というものは出家者\梵行者にとつて垢である」とも言われる。夫婦で出家した場合でも庵や経行処は別々で必要な時以外は会わない。

b、女仙人

仙人はほとんど男であるが、女仙人もわずかながら存在する。四五八話と五三九話の二例では后が都市の園林で仙人出家し、山岳修行はしていない。

(駒沢大学大学院)